

風通しの良さと広域連携で 小規模校の校内研修を活性化

山形県 尾花沢市立福原中学校

教師が互いに遠慮なく意見を言い合える雰囲気——。これが尾花沢市立福原中学校の特徴だ。学習指導案を練るとなれば、教科の枠を超えて、アイデアを出し合う。教職員17人という小規模校の不利な条件を克服すべく、学校ぐるみ、地域ぐるみで授業力向上に取り組む。

▼福原中学校に見る▼不易

風通しの良い雰囲気 で授業力向上

予告なし、準備なし
「研究カフェ」で気軽に意見交換

少しの空き時間に、教師がマグカップを手に集まり、発問の工夫について議論する――。

尾花沢市立福原中学校では、指導のアイデアがほしい時などに、教師同士が呼び掛けて「研究カフェ」を開く。スケジュールは特に決められていない。手の空いた教師が集まり、自由に意見交換をする場だ。

例えば、ICT教育を研究する三十代の教

師が、研究発表の準備を進めていた時のこと。

本番前に出来栄えを見てもらおうと、校長室を訪れた。池田史明校長はすぐに隣の職員室にいた教師に声を掛け、校長室で「研究カフェ」を開いた（P.24写真1）。

「必要な時に適宜開くのが『研究カフェ』です。アイデアがほしいその時に、いろいろな視点からの意見を聞けるメリットがあります。また、意見を言う側も他の人の意見が聞け、授業づくりの参考になります。私の役割は、必要だと思った時に、機を逃さず先生方

School Data

◎1947（昭和22）年開校。同校のある山形県内陸北部の尾花沢市は、越後高田、飛騨高山と並んで日本三雪の地とされる日本有数の豪雪地帯。校訓は「敬愛・努力・自学自修」。合唱が盛ん。



校長◎池田史明先生

生徒数◎115人 学級数◎5学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒999-4553 山形県尾花沢市大字野黒沢208

TEL◎0237-25-2041

URL◎<http://www.city.obanazawa.yamagata.jp/477.html>

公開研究会◎未定



尾花沢市立福原中学校校長

池田史明

Ikeda Shirohiko

「自分が好きで、自分に自信があり、何にでもチャレンジするような子どもたちを育てたい」

に声を掛けることと、時々茶菓子を差し入れることぐらいです」（池田校長）

「研究カフェ」の内容や形式にも堅苦しいルールはなく、事前の資料提出なども不要だ。池田校長は「余計な準備はしなくてよい」と呼び掛けていると話す。

「準備をすると、それにとらわれてしまいがちです。それでは良いアイデアが出ないと、思うからです」



写真1 研究発表の準備を進めている体育科の教師が「見てください」と校長室に来た。池田校長が教頭や他教科の教師にも声を掛けて「研究カフェ」が始まった。モニターを使ったプレゼンテーションに対して、教師はざっくばらんにアイデアを出し合った

子どもに良い影響を及ぼす 協力し合える教師関係を目指す

同校は生徒1115人、教職員17人の小規模校だ。校区は広く、学校から約8km離れたところに住む生徒もいる。多くの生徒は夏は自転車通学し、積雪のある冬は保護者が車で送り迎えをしている。三世代同居の家庭が多いためか、半数以上が祖父母による送迎だという。校区には小学校が4校あり、いずれも小規模校だ。学校が荒れていた時期もあったが、ここ10年は落ち着いている。

そうした環境の同校に池田校長が赴任したのは2009年のこと。以来、教師が発言し

やすく、校長室に出入りしやすい雰囲気づくりに気を配ってきた。この方針は、山形県教育センターでの経験が土台にあると池田校長は話す。

「当時、同僚と自由にアイデアを出し、ホワイトボードに書き込んで話し合いを重ねるという方法を度々行っていました。遠慮せずに意見を言い合えるためか、良いアイデアが出てくるのです。また、以前の勤務校では、『ほっとできる』『相談しやすい』という雰囲気が職員室にあり、先生方の働く意欲だけでなく、生徒にも良い影響があるという体験をしました。本校でも、そうした人間関係や『やれることを皆で協力して取り組もう』という雰囲気をつくりたいと思いました」（池田校長）

他教科の教師でも理解できる 学習指導案を目指す

校内に自由に発言できる雰囲気をつくりながら、同時に進めてきたのは年4回の校内授業研究会だ。

「いろいろな先生方を見てきて思うことは、初任校で教わった方法をそのままずっと続けている先生が多いということです。最初にきちんと教えてもらった場合はその後の指導もうまくいきますが、そうでないケースも見られます。そこで、学習指導案の書き方も授業

の進め方も、内容の良し悪しや先生方のキャリアを問わず、全員で見直せるような研究会にしています」（池田校長）

10年度は、山形県教育センターの研究協力校に指定され、同センターが開発・作成した「授業研究ハンドブック」を活用した研究を進めてきた。

「指導案の素案づくりから成果・反省まで、教師全員で取り組みました。特に力を入れたのは、授業の事前研究です。素案づくりの段階から、授業者本人と指導主事、周りの教師がチームを組んで進めました」（池田校長）

同校には、数学科担当は3人、英語科担当は2人いる。それ以外の教科担当は1人ずつしかない。そのため、各教科で個別に研修を行うことが難しい状況にあった。

「教科の間に垣根のようなものがあり、『専門以外の教科は分からない』という先生もいます。しかし、1コマの授業ごとに目標があり、そのための教材を準備し、どのように生徒に伝えるかを工夫することの大切さは、すべての教科に共通しています。また、教師全員で課題を共有して、活発な意見交換をすることで、生徒が分かる授業づくりを出来るよう、極力、教科特有の専門用語を使わずに、誰でも理解できる言葉で書かれた指導案を目標としました」（池田校長）

指導案の素案づくりの段階では「研究カフェ」も開き、どのような発問が良いのか、

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第1回

中学校教育の不易と流行



写真2 どの教室にも、後ろに「校長の椅子」が置かれている。池田校長は、時間を見つけては生徒と一緒に授業を受ける。「指導の内容を指摘するのではなく、生徒の態度の良さなどを話題にするように配慮しています」（池田校長）

同校は、山形県内陸北部の4市町から成る北村山地区にある。ここでは、地区の校長会が中心となり、地区内の中学校13校が連携して研修を行っている。07年度からは、「創意工夫に満ちた教育課程の編成・実施」を学校経営研究テーマに掲げ、共同研究を進めてきた（P.26図1）。

連携校には同校と同じような小規模校が多く、教科担当が1人しかないために校内研究が成立しにくいという課題を抱えていた。そこで、各校の授業研究会の日程と内容を記した「地区内授業研究会一覧」を作成し、他校の授業研究会への参加を奨励。また、教育

委員会の協力を得て、教務主任や研究主任のための研修会を開催している。

特筆すべきは、地区内の全小・中学校の校内研究をまとめた『北村山の学校』の発行だ。各校が設定したテーマに基づき、実践に役立つ指導や調査研究の結果などをまとめて掲載。09年度までに57集を発行している、半世紀以上、毎年続いている取り組みだ。

「多くの研究成果に触れることで、校内研究の機会の少なさを補えます。また、小・中学校の実践を別々にまとめず、一冊に統合することで、小学校の取り組みからも学ぶことが出来ます」（池田校長）

このように、昔から学校が地域ぐるみで力を合わせて学力向上に取り組む同地区の気風も、福原中学校の研究を後押ししている。

どのような構成にすれば良いか、教師は教科の枠を超えて話し合う。

「先生方は、直接顔をつき合わせて話し合った方が楽しく、良いアイデアが出ると言っています。授業者は、出てきた案から自分に合うものを取り入れてまとめ上げるのは大変ですが、それも勉強になると捉えているようです」（池田校長）

このようにして指導案作成に重点的に取り組んだ結果、どの教科の教師にも分かりやすい指導案を作れるようになっていった。ある教師は、生徒の実態を分析した結果など、指導案を作る際にポイントとなる個所に吹き出しを付けた。これは、同校ではそれまでにな

かったスタイルだ。すると、これが分かりやすいと好評で、他の教師もこの方法を取り入れるようになった。前例がなくても、新しいアイデアに挑戦する、冒険できる、良いものは積極的に取り込んでいく。そうした雰囲気は校内に根付いてきている。

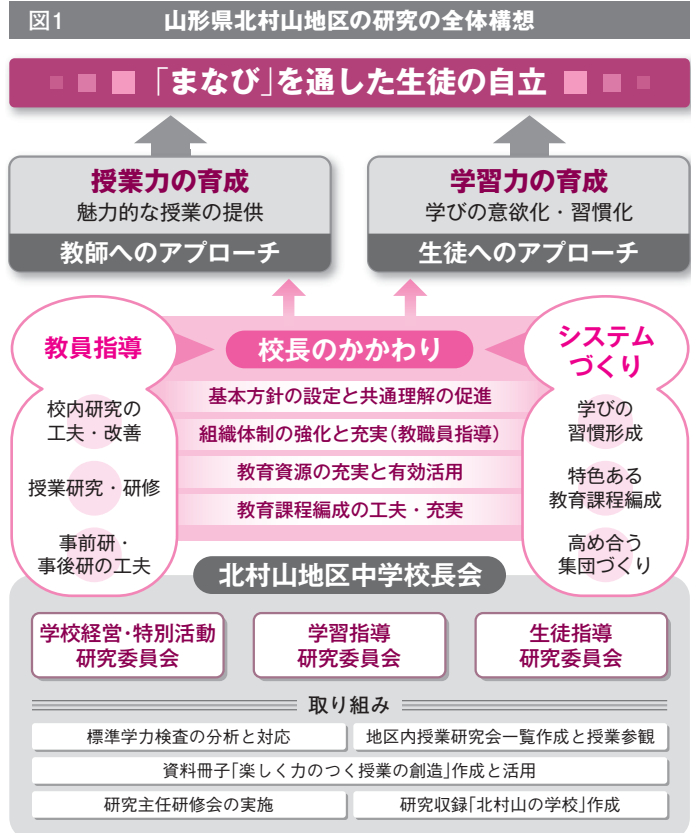
同校では、教師が夜遅くまで残っていることがほとんどなく、遅くとも夜7時半ごろに

は帰るといふ。職員室で声を掛ければすぐに始められる「研究カフェ」のような柔軟なスタイルを取り入れた結果、準備段階での心理的な負担が減っただけでなく、検討会の開催そのものに必要な準備が省け、形ばかりの準備もいらなくなった。同校の場合、形にとらわれないフットワークの良さが、全体的な業務の効率化にもつながっているのだろう。

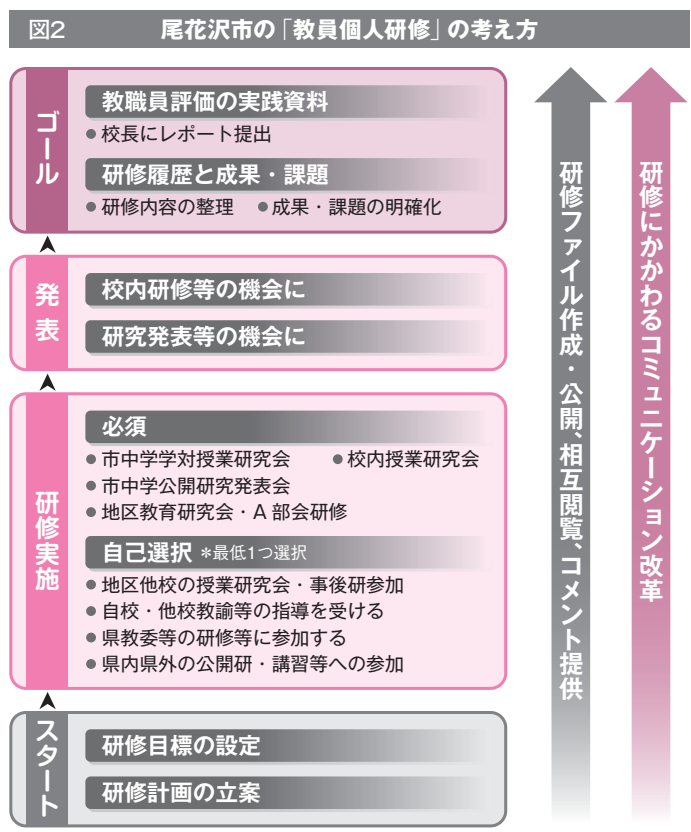
福原中学校に見る「不易」

地区内の小・中学校挙げての学力向上

地区内の13中学校が連携し互いに授業力を高める



*同校の資料を基に編集部で作成



*同校の資料を基に編集部で作成

福原中学校に見る「流行」

研修体制を改善し、やりがいを高める

「個人研修ポートフォリオ」で
研修の積み重ねを実感

地区全体だけでなく、尾花沢市内の中学校
全5校による授業力向上の取り組みもある。
一つは、年1回の同一日程による授業研究
会だ。A中学校は数学、B中学校は英語とい
うように、学校ごとに教科を分担し、同じ日
に授業研究会を開催するもの。市内の同じ教

科の教師が顔を合わせて話したり、課題を共
有したりする良い機会となっている。
もう一つは、市の中学校長会の主導により
10年度に始めた「校内授業研究会」だ。これは、
「校内授業研究会」や「市中学公開研究発表
会」といった必須の研修に加えて、教師個人
が自己選択で研修を受けるといふもの(図
2)。年度初めに自分で目標と研修計画を立
て、それに沿って実践していく。研修の資料

やレポートは「個人研修ポートフォリオ」
に綴じる(写真3)。このファイルは
校長室の棚に置いてあり、他の教師も閲覧し
て気付いた点やアドバイスを自由に記入する
ことが出来る。
「どの先生のファイルも分厚く、自分のた
めに取り組んだ研修の履歴を実感できるファ
イルになっています。『自分はこれだけのこ
とをした』という自信を持って、周囲にアピー
ルできる材料にもなるはずですよ(池田校長)
09年度まで、市の中学校長会の取り組みと
して教員個々が研究成果を発表する個人研究
発表会を年1回行ってきた。その成果を踏ま

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第1回

中学校教育の不易と流行

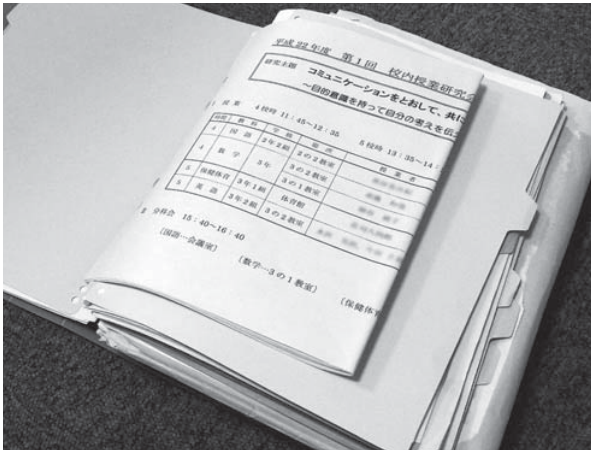


写真3 「個人研修ポートフォリオ」のファイル。外部研修などの資料1年分を1冊のファイルに綴じる。これは、1カ所にまとめて置かれ、どの教師も自由に見て、気付いた点やアドバイスを書き込んでいる

え、更に教科に限らず視野を広げる方向の教員個人研修に切り替えた」と、池田校長は話す。

「本来、大切なのは、『発表のための研究』ではなく、『自分のための研修』です。そこで、教科単位ではなく、個人単位での研修を始めることにしたのです」

小規模校で1教科に担当者が1人しかいないければ、個人的な研修のために出張するのは難しい。しかし、個人研修の計画にあるものは、基本的に許可するように各校の校長とで申し合わせた。

『教員個人研修』はまだ1年目で、先生方に浸透しているとは言い難い状況です。ただ、自ら外部の研修に向く先生が増えてきているので、そうした姿を伝えて、広めていきたい

「と思います」(池田校長)

生徒に夢を持たせるために 教師のアイデアが問われる

「俺、生きがいがないんだよ」

約二十数年前、受け持っていた生徒がポツリと漏らしたこの言葉が、池田校長の教育の原点だ。校内暴力が社会問題化していた時代、荒れていた学校で生徒指導主事を務めていた池田校長は、関係各所に謝罪に回る日々を送っていた。この言葉を聞いた時も、謝罪の帰り道だった。

「とにかく驚きました。十代そこそこの子どもがそんなことを言うのですから。真つ先に考えたのは、『夢を持てる生徒を育てよう』ということ。学力を伸ばすことに加えて、自己有用感を与える場としての授業づくりの大切さを痛感しました」(池田校長)

同僚にネーミングが上手な教師がいた。補習の時間を「ブラッシュアップタイム」と名付けると、それまで見向きもしなかった生徒が次々と参加した。池田校長は、生徒を学習に向かわせるためにアイデアを出し合う重要性を痛感したという。教師同士が自由に話し合える雰囲気づくりに腐心しているのも、それが夢を持てる生徒を育てることにつながる

と考えるからだ。「アイデアを出したり、意見を交わすにし

ても、たたき台が必要です。議論のもとがあり、そこから磨かれていくからこそ、良い取り組みとなるのです。私は理科が専門ですが、以前3年間かけて作った問題集を、先日、先生方に見ていただきました。それをまねしてほしいというのではなく、この問題集から何か別の取り組みに発展させてほしいと思っただけです。アイデアは自分の経験からしか生まれません。自分が良いと思うものを先生方と共有し、波及させ、更に良いものとなるように努めていきたいと思っています」(池田校長)

池田校長が考える教育の不易

PDCAとよくいわれますが、私はPlanとDoの間に「Set(準備・段取り)」が必要だと考えています。これは、生徒が主体的に活動できるための仕組みですが、案外おろそかにされがちです。生徒の活動計画があっても、実際には教師が一方的に指示をしている場面がよく見受けられます。

何をどのようにするかを理解し、生徒が自ら行動するならば、意欲と自信が得られます。結果としてうまく出来たとしても、それが教師の指示によるものならば「やらされ感」が残り、指示待ち人間になってしまうでしょう。生徒をその気にさせて動かす「Set」が出来る教師でありたいと思います。